食卓における協同調理行為がもたらすコミュニケーションの分析
Analysis of Communication through Cooperative Cooking on Table

坂井田 瑠衣[†]，諏訪 正樹[‡]
Rui Sakaida[†], Masaki Suwa[‡]

[†]慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科，[‡]慶應義塾大学環境情報学部
[†]Graduate School of Media and Governance, Keio University,
[‡]Faculty of Environment and Information Studies, Keio University
lui@sfc.keio.ac.jp

Abstract

We observed and analyzed how the styles of communications through cooking on table would be different, according to what kind of meals we cook. Focusing on “Nabe”, Japanese styles of one-pot dish, and “Takoyaki”, octopus dumplings, it was suggested that the communication through “Nabe” was supposed to be static, and that the communication through “Takoyaki” was to be frank and dynamic.

Keywords — Communication, Cooperative Cooking, Multimodal Analysis

1. はじめに

家族や友人らとともに食卓を囲む行為は「共食」と呼ばれ，人間関係の希薄化が進む現代社会において，その果たす役割が注目されている．近年，共食の場において生起するコミュニケーションを対象とした分析的研究が試みられ始めており，例えば銘々皿と大皿という異なる食事の提供様式が，生起するコミュニケーションの秩序を変容させることが確かめられている（武川，2009）．

本研究では，協同調理行為を伴う共食の場におけるコミュニケーションを分析対象とする．本稿では，卓上で鍋や鉄板を使用してお好み焼き，焼肉などを調理する行為全般を指して，協同調理行為と称する．特に多人数が親睦を深めるための食事にて，鍋料理が採用されることが多いが，これは協同調理行為がコミュニケーションの潤滑油として機能しうることを示唆している．本研究では，協同調理行為を伴う献立として，「鍋料理」を介した会話，および「たこ焼き」を介した会話を分析対象とし，異なる献立の協同調理行為を伴う共食行為がコミュニケーションの質に与える影響を観察する．

第一著者が自宅において開催する食事会におけるコミュニケーションに参与し，参与者の一員として生起するコミュニケーションの有様を観察するという方法を採った．実生活の文脈に則した会話における，可能なかぎり自然な振る舞いを観察するため，実生活において親しい間柄の参与者による食事会を設定した．昨今，あらゆる知能研究分野にて内部観測的方法論の必要性が謳われつつある（諏訪, 2012）．本研究においても，研究者自ら参与観察することにより，参与者以外には理解しえない発話の意図や参与者同士の関係性を内部観測により忠実に記述することを目指した．

なお本研究で明らかになるのは，あくまでも当該参与者間において状況依存的に発生したコミュニケーションの特性であり，コミュニケーションのメカニズムに関する一般原則が導かれるわけではない．むしろ個別具体的な事象に迫ることで，普遍性はないものの，他の状況にも適用が見込まれる詳らかな知見の提供をめざす．

本稿では，2 章にて参与者の選定基準や参与者間の権力関係などの実験概要をナラティブに記述した上で，3 章にて会話の音声および映像データを提示し，言語行為と非言語行為とのマルチモーダル分析を行う．4 章ではそれらの分析をもとに，本実験において生起したコミュニケーションの特性を考察する．

2. 実験概要

2.1. 参与者（被験者）の選定

本研究の参与者は，第一著者（以下，S と表記），第一著者が所属する研究室の親しい後輩（以下，

H)，第一著者が所属する学生団体の親しい後輩（以下，F）の 3 名である．H と F は同学年の友人であり，3 名は互いに他と親しい間柄である．一般に会話を分析対象とした実験では，初対面の被験者らを組み合わせて会話させることがしばしばある．知り合い同士が被験者となる場合，互いに実験以前に共有している情報があるため，共有済みの情報が省略されてしまうことがある．その場合，実験における発話だけを頼りに相互行為を理解することは困難である．本実験の参与者は互いに以前から親しいものの，3 名全員が一堂に会することは，本実験以外の場においてはまずありえない（少なくとも二度の実験が終了した時点では，過去に一度もない）．そのため，実験の場以外において 3 名全員で共有する情報はほとんどなく，会話実験の参与者の組み合わせとして適切であると判断した．

2.2. 被験者に対する教示にかかわる問題

可能なかぎり自然な会話を実現するために，参与者 H と F には，実験のデータ収録として食事会を開催する旨だけを伝え，実験の意義や意図，会話のトピックなどの注意事項は一切教示しなかった．S が参与者兼観察者である以上，実験の意図を把握していることは免れないが，実生活に根ざした会話の場を記録することで，実験者ですら記録に収められていることを忘れて会話に没頭することができる．念のため実験の意図を知る者を 1 名に留め，互いに実験であることを意識した恣意的な振る舞いに陥らないよう努めたが，実験者自らが楽しみながら食事会に参与することで，実験室実験では得られない自然な会話を実現しながら，参与観察することを実現できていると考えられる．

2.3. 参与者間の権力関係

H と F はそれぞれ S の後輩であるが，S は H，F それぞれと非常に親しい関係性にある．日頃から食事などのインフォーマルな場において，S に対して H や F が敬語を省略した発話をすることも珍しくない．そのため，上下関係を意識した気遣いによって，コミュニケーションにおける自然な振る舞いが阻害されるとは考えられにくい．本実験においても，主に F の発話中に，S に対しての敬語を省略したうなずきなどが複数回観察された．

2.4. データ収録方法

S の自宅に H と F を招いて開催した食事会において，ビデオカメラ及び IC レコーダーを用いて，食卓における会話を収録した．映像は食卓の真上に設置したビデオカメラで，参与者の身体および食卓の様子を常に観察できるカメラアングルで収録した（図 1）．音声は，3 名が合流し，会場である S の自宅に向かう時点から収録を開始した．発話データの明瞭さを担保するため，ピンマイク付き IC レコーダーを全員が装着した．

図 1: 本実験で撮影した映像データ[1]

3. 分析

3.1. 分析対象データ

二度の実験により得られた会話データを観察したところ，いずれも以下のような 3 局面を経て食事が進行していた．

1. 食材を用意して調理を開始する
2. 料理ができあがる前に乾杯し，飲酒を開始する
3. 料理が完成したところで食事を開始する

（1〜3 を複数回繰り返す）

そこで本稿では，各局面におけるコミュニケーションの質の変遷を明らかにするために，たこ焼きおよび鍋料理の会話データから，各々最初の 1

[1] 被験者のプライバシーに配慮してイラストに加工した．左から H，F，S の順．本図は鍋料理を介した会話の様子であるが，たこ焼きにおいても同様の席順とした

～3 局面が展開されている部分を抽出し，分析対象とした.鍋料理の分析対象範囲は約 26 分 00 秒，たこ焼きの分析対象範囲は約 33 分 53 秒である.

3.2. 分析方法

本研究では，協同調理行為を伴う食卓における言語行為の分析単位として「話題カテゴリ」，非言語行為の分析単位として「利き手動作カテゴリ」を提案する.

(1) 話題カテゴリ

協同調理行為を伴う食卓において展開される発話は，その意味内容によって以下の 3 種類に大別される.

1. 共食／協同調理行為を遂行するための話題
2. 共食／協同調理行為から直接派生した話題
3. 共食／協同調理行為と無関係または関係性の弱い話題

これらの話題が協同調理行為と並行してどのように展開されるかを観察することで，各々の食事形式におけるコミュニケーションの展開の特徴が詳らかになる．この話題カテゴリに基づいて，会話分析用ソフトウェア ELAN を使用し，繰り広げられた話題のアノテーションを行った.

(2) 利き手動作カテゴリ

協同調理行為を伴う食卓における身体行為として最も特徴的なのは，調理にかかわる身体行為が，繰り広げられる話題とは独立に展開されうるという点である．本研究では，身体行為の中でも調理や食事行為に最も強くかかわると考えられる利き手（本実験においては全員が右手）の動作に着目した．協同調理行為を伴う食卓における各参与者の利き手動作を観察したところ，それらは表 1 の 6 種に大別できることが判明した．このうち 5，6 については，ジェスチャー研究における分析概念を引用している（細馬, 2008）．これらのカテゴリに従って，利き手動作にアノテーションを行った.(1)と同様に ELAN を使用し，収録した会話の映像データを参照しながらアノテーションを行った.

なお，利き手動作のアノテーションに際して，どの時点からどの時点を一連の動きと判断すべきか，という問題が生じた．本稿では，Kendon（Kendon, 2004）のジェスチャー分析単位を参考に，ある動きの開始時点は，ジェスチャーで「準備」に該当する動きの開始時点，また終了時点は，ジェスチャーでホームポジションへの「復帰」に該当する時点までとした.

表 1: 利き手動作カテゴリ

1. 調理にかかわる動作
材料を鉄板や鍋に加える，食材を混ぜる，裏返す，成形する，アクをとる，など
2. 他者もしくは全体の食事にかかわる動作
他者に食事を取り分ける，調味料や薬味を手渡す，など
3. 自分の食事にかかわる動作
自らに食事を取り分ける，箸を持つ，など
4. 身体を調整する動作
頬／額／髪／口／鼻をなどの身体部位を触る，身体の均衡を維持するためテーブルに手をつく，など
5. ジェスチャー
表象，ポインティングなど
6. ホームポジション
手を膝に置く，頬杖をつく，など

3.3. 分析結果

(1) 話題カテゴリによる分析

表 2: 鍋料理における話題カテゴリの分析結果[2]

話題カテゴリ	頻度(回)	合計時間	
		(秒)	(%)
1. 共食/調理遂行のための話題	13	152.583	10.4%
2. 共食/調理から直接派生した話題	8	261.982	17.8%
3. 共食/調理と関係性の弱い話題	16	1058.26	71.9%
合計	37	1472.825	

表 3: たこ焼きにおける話題カテゴリの分析結果

話題カテゴリ	頻度(回)	合計時間	
		(秒)	(%)
1. 共食/調理遂行のための話題	22	809.636	43.0%
2. 共食/調理から直接派生した話題	13	256.22	13.6%
3. 共食/調理と関係性の弱い話題	21	818.407	43.4%
合計	56	1884.263	

[2] 全話題カテゴリの合計時間が分析対象範囲の合計時間より少ないが，これは話題カテゴリ間の沈黙を加算していないためである.話題間の沈黙がコミュニケーションの質にどのように関与しているかを調べることも課題であるが，本稿では言及しない．表 3 も同様

表 2 は，鍋料理における話題カテゴリの分析結果である.「共食／協同調理行為と無関係または関係性の弱い話題」が累計時間の 71.9%を占めており，さらに「共食／調理から直接派生した話題」を加えると約 90%に達することから，鍋料理は調理の難易度が高くなく，調理遂行のための話題によって会話が占拠されなかった可能性が示唆される.

表 3 は，たこ焼きにおける話題カテゴリの分析結果である.「共食／調理遂行のための話題」（43.0%）と「共食／協同調理行為と無関係または関係性の弱い話題」（43.4%）がほぼ同割合で出現頻度が高い．たこ焼きの調理行為には時間がかかる上にその難易度も高く，調理遂行のための話題が多数回出現せざるをえないことが起因したと考えられる.

(2) 利き手動作カテゴリによる分析

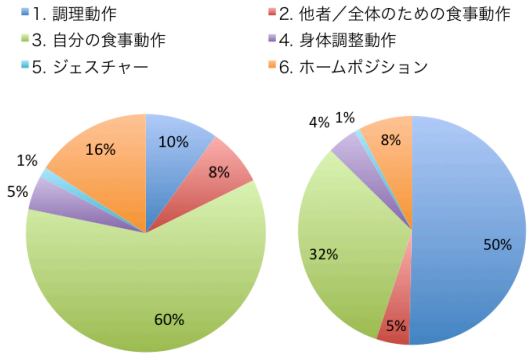

図 2: 鍋料理とたこ焼きの利き手動作の割合[3]
（総計．左から鍋料理，たこ焼き）

参与者全員の利き手動作データを総計すると，鍋料理の場合，全体の利き手動作のうち「調理動作」が 10%，「他者／全体のための食事動作」が 8%，「自分の食事動作」が 60%，「身体調整動作」が 5%，「ジェスチャー」が 1%，「ホームポジション」が 16%であった（図 2 左）．たこ焼きの場合，全体の利き手動作のうち「調理動作」が 50%，「他者／全体のための食事動作」が 5%，「自分の食事動作」が 32%，「身体調整動作」が 4%，「ジェスチャー」が 1%，「ホームポジション」が 8%であった（図 2 右）．鍋料理に比べてたこ焼きでは，身体を調理に従事させる時間が長かったことが読み取れる.

次に，各参与者別の利き手動作データを総計した．鍋料理の場合（図 3），招待者である S が積極的に「調理動作」（20%），「他者／全体のための食事動作」（10%）を行っており，H は「調理動作」（10%），F は「他者／全体のための食事動作」（13%）という方法で，食事遂行に対して積極的に関与していることが分かる．一方で H と F は共に「ホームポジション」が占める割合が高く（各々 24%と 22%），招待者である S に調理や食事遂行にかかわる動作を委ねて，リラックスしている時間も長いことを示唆している.

たこ焼きの場合，各参与者に特有な傾向はほとんど現れなかった（図 4）．鍋料理と同様，H と F の「ホームポジション」が占める割合は S に比べて高く（12%と 9%），これは H と F という個別参与者の利き手動作における，調理形式にかかわらない傾向である可能性がある.

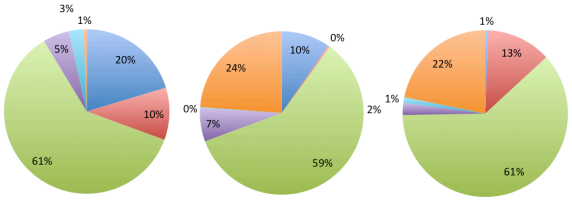

図 3: 鍋料理における利き手動作の割合[4]
（左から参与者 S，H，F）

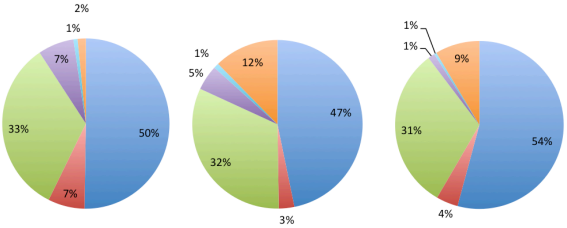

図 4: たこ焼きにおける利き手動作の割合[5]
（左から参与者 S，H，F）

[3] 分母は利き手動作の総時間．鍋料理は 3956.537 秒，たこ焼きは 5225.146 秒．複数参与者の重複があるため，分析対象範囲の実時間より長い

[4] 分母は各参与者の利き手動作総時間．S は 1260.179 秒，H は 1308.439 秒，F は 1387.919 秒

[5] S の利き手動作総時間は 1623.422 秒，H は 1791.929 秒，F は 1809.795 秒

表 4-1: 鍋料理・第 1 局面の利き手動作[6]

利き手動作＼参与者	S	H	F	計
調理動作	85.171	119.837	8.336	213.344
	66.9%	94.3%	5.1%	50.9%
他者／全体のための食事動作	29.259	1.15	136.52	166.929
	23.0%	0.9%	82.8%	39.8%
自分の食事動作	2.155	0	2.944	5.099
	1.7%	0.0%	1.8%	1.2%
身体調整動作	10.13	6.151	1.174	17.455
	8.0%	4.8%	0.7%	4.2%
ジェスチャー	0.63	0	4.764	5.394
	0.5%	0.0%	2.9%	1.3%
ホームポジション	0	0	11.209	11.209
	0.0%	0.0%	6.8%	2.7%
計	127.345	127.138	164.947	419.43

表 4-2: 鍋料理・第 2 局面の利き手動作

利き手動作＼参与者	S	H	F	計
調理動作	170.945	5.85	0	176.795
	44.3%	1.3%	0.0%	13.8%
他者／全体のための食事動作	100.262	3.642	38.38	142.284
	26.0%	0.8%	8.5%	11.1%
自分の食事動作	81.42	172.544	141.458	395.422
	21.1%	39.1%	31.4%	30.9%
身体調整動作	22.407	51.815	23.43	97.652
	5.8%	11.7%	5.2%	7.6%
ジェスチャー	11.168	0	3.781	14.949
	2.9%	0.0%	0.8%	1.2%
ホームポジション	0	207.547	243.397	450.944
	0.0%	47.0%	54.0%	35.3%
計	386.202	441.398	450.446	1278.046

表 4-3: 鍋料理・第 3 局面の利き手動作

利き手動作＼参与者	S	H	F	計
調理動作	0	0	0	0
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
他者／全体のための食事動作	0	0	0	0
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
自分の食事動作	682.025	604.489	709.365	1995.879
	91.3%	81.7%	91.8%	88.3%
身体調整動作	32.597	28.392	7.91	68.899
	4.4%	3.8%	1.0%	3.0%
ジェスチャー	24.223	2.42	6.76	33.403
	3.2%	0.3%	0.9%	1.5%
ホームポジション	7.787	104.602	48.491	160.88
	1.0%	14.1%	6.3%	7.1%
計	746.632	739.903	772.526	2259.061

表 5-1: たこ焼き・第 1 局面の利き手動作

利き手動作＼参与者	S	H	F	計
調理動作	212.512	296.02	355.253	863.785
	52.4%	56.6%	67.9%	59.5%
他者／全体のための食事動作	89.94	50.883	75.101	215.924
	22.2%	9.7%	14.4%	14.9%
自分の食事動作	28.202	11.077	3.18	42.459
	7.0%	2.1%	0.6%	2.9%
身体調整動作	68.717	9.23	6.88	84.827
	16.9%	1.8%	1.3%	5.8%
ジェスチャー	6.1	5.935	7.498	19.533
	1.5%	1.1%	1.4%	1.3%
ホームポジション	0	150.12	74.939	225.059
	0.0%	28.7%	14.3%	15.5%
計	405.471	523.265	522.851	1451.587

表 5-2: たこ焼き・第 2 局面の利き手動作

利き手動作＼参与者	S	H	F	計
調理動作	525.062	519.292	550.617	1594.971
	98.2%	95.1%	100.0%	97.8%
他者／全体のための食事動作	0	0	0	0
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
自分の食事動作	0	0	0	0
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
身体調整動作	5.53	11.856	0	17.386
	1.0%	2.2%	0.0%	1.1%
ジェスチャー	4.352	6.973	0	11.325
	0.8%	1.3%	0.0%	0.7%
ホームポジション	0	7.716	0	7.716
	0.0%	1.4%	0.0%	0.5%
計	534.944	545.837	550.617	1631.398

表 5-3: たこ焼き・第 3 局面の利き手動作

利き手動作＼参与者	S	H	F	計
調理動作	78.417	23.31	74.845	176.572
	11.5%	3.2%	10.2%	8.2%
他者／全体のための食事動作	24.985	1.99	0.72	27.695
	3.7%	0.3%	0.1%	1.3%
自分の食事動作	512.809	565.348	563.378	1641.535
	75.1%	78.2%	76.5%	76.6%
身体調整動作	38.274	65.164	16.571	120.009
	5.6%	9.0%	2.3%	5.6%
ジェスチャー	2.837	4.873	1.205	8.915
	0.4%	0.7%	0.2%	0.4%
ホームポジション	25.685	62.142	79.608	167.435
	3.8%	8.6%	10.8%	7.8%
計	683.007	722.827	736.327	2142.161

(3) 食事局面による利き手動作分析

本章 1 節で述べたとおり，協同調理行為を伴う会話場面は，食事の進行状況により，「調理開始〜乾杯」，「乾杯後〜料理完成」，「料理完成後」の 3 局面に大きく分けられる．

表 4-1〜3 は，鍋料理の 3 局面における利き手動作の比率を示したものである．第 1 局面は，3 名の異なる役割分担が最も明確に観察される局面である．招待者である S が「調理動作」と「他者／全体のための食事動作」に比較的万遍なく従事しているのに対し，H は「調理動作」に，F は「他者／全体のための食事動作」に，各々重点的に従事している．第 2 局面になると，「調理動作」や「他者／全体のための食事動作」は S に全面的に委ねられ，H と F の利き手は「ホームポジション」に落ち着いている時間が長い．第 3 局面では調理が一段落していることもあり，各参与者とも「調理動作」や「他者／全体のための食事動作」に従事している様子は観察されず，「自分の食事動作」に集中していることが分かる．

表 5-1〜3 は，たこ焼きの 3 局面における利き手動作の比率を示したものである．全ての局面に

[6] 表中上段は実時間（秒），下段は各参与者の利き手動作の総時間に占める割合（%）．以下，表 5 まで同様

おいて最も多く生起している「調理動作」に着目すると，局面ごとに出現の頻度が参与者に依存せず変化していることが分かる．第 1 局面では 52.4～67.9%，第 2 局面では 95.1～100.0%，第 3 局面では 3.2～11.5%であり，第 2 局面ではほぼ全ての利き手動作が「調理動作」であるのに対し，第 3 局面では急激に頻度が下がる．たこ焼きを介したコミュニケーションにおいては，全ての参与者が「調理動作」という利き手動作に，局面ごとに同等の頻度で従事するという経験を共有していたと考えられる．

(4) 話題と利き手動作のマルチモーダル分析

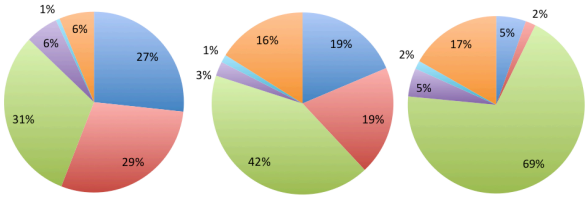

図 5: 鍋料理における利き手動作の割合[7]
(左から話題カテゴリ 1，2，3)

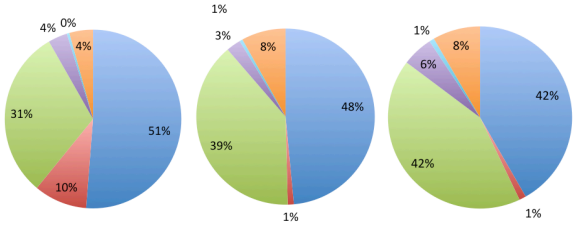

図 6: たこ焼きにおける利き手動作の割合[8]
(左から話題カテゴリ 1，2，3)

各々の利き手動作と共起しやすい話題を分析するために，前述した話題カテゴリと利き手動作カテゴリを用いたマルチモーダル分析の結果を示す．

図 5 に示すとおり，鍋料理において「1. 共食／協同調理行為を遂行するための話題」と頻繁に共起する利き手動作は，「自分の食事動作」(31%)，「他者／全体のための食事動作」(29%)，「調理動作」(27%) であった．「2. 共食／協同調理行為から直接派生した話題」と共起する利き手動作の頻度は，「自分の食事動作」(42%) が最も高く，次いで「調理動作」および「他者／全体のための食事動作」(ともに 19%)，「ホームポジション」(16%) と続いた．「3. 共食／協同調理行為と無関係または関係性の弱い話題」では，「自分の食事動作」が圧倒的に高い頻度を示した (69%)．

図 6 に示すとおり，たこ焼きにおいては，話題による利き手動作の頻度はあまり変化しなかった．どのような話題もほとんどが調理行為や個々の食事行為を伴いながら展開されており，たこ焼きを介した会話においては，あらゆる話題が等価のものとして扱われながら会話が進行するという秩序が生まれたと考えられる．

4. 考察

前章の分析をもとに，鍋料理とたこ焼きを介して生起したコミュニケーションの特徴を考察する．

全体として，たこ焼きを介した会話には，鍋料理に比べて，「共食／調理遂行のための話題」が多く出現していた．利き手動作も「調理動作」が高頻度で出現しており，発話と身体行為がともにたこ焼きの共食／調理行為との密接なかかわりを保ち続けていた．鍋料理では，たこ焼きに比べて「共食／協同調理行為と無関係または関係性の弱い話題」が多数出現しており，利き手動作も「調理行為」および「他者／全体のための食事動作」に従事する時間は長くなく，調理行為に会話が支配されることなく話題が展開していた．

参与者別の利き手動作を観察すると，たこ焼きにおいては全員がほぼ同頻度で「調理行為」や「他者／全体のための食事動作」に従事していたのに対し，鍋料理では S がその両者を担い，H が「調理行為」，F が「他者／全体のための食事動作」に加担するという明確な役割分担がされていた．「鍋奉行」という俗語が存在するように，鍋料理において特定の参与者が「調理行為」に従事しやすいことは生活者の直感にも合致するが，本実験においては，S という鍋奉行にあたる者が出現することで，他の参与者はその調理動作を補助したり，調理以外の他の仕事を探して従事したりした．つ

[7] 分母は各話題カテゴリの利き手動作総時間．カテゴリ 1 は 420.517 秒，2 は 706.368 秒，3 は 2899.257 秒
[8] 分母は各話題カテゴリの利き手動作総時間．カテゴリ 1 は 2311.257 秒，カテゴリ 2 は 838.89 秒，カテゴリ 3 は 2940.746 秒

まり，参与者間の自発的な役割分担が促されたと考えられる．

もっともこの性質が，参与者の性格や関係性に大きく影響を受けることは想像に難くない．今回鍋料理の実験において「他者／全体のための食事動作」を担った参与者Fは，招待者であるSの後輩であったことに加え，他者に対する気遣いに極めて長けた人物である．反対に言えば，鍋料理という調理形式が，S のいわば“鍋奉行性”を覚醒させてしまったことで，自分も何か仕事をしなければならないというFやHの思いを誘発し，自発的な役割分担を強要してしまった可能性もある．

では，鍋料理に見られたような役割分担をもたらさない，たこ焼きを介したコミュニケーションの性質は何であったのか．鍋料理の場合には上下関係や招待者／非招待者の関係性によって構築されていたとみられる自発的な役割分担の様子が，たこ焼きにおいては観察されなかった．これは，全ての参与者が，たこ焼きという高難易度かつ参与者間で等価の「調理行為」に長時間従事しなければならなかったことで，役割分担が発生することが妨げられたためであると考えられる．たこ焼きにおいては，局面ごとの利き手動作の頻度も，参与者間で等しく推移している．参与者全員で難易度の高い同じ動作を長時間共有することで，参与者同士の上下関係や招待者／非招待者の非対称な関係性を，緩やかに融解してくれた可能性がある．

むろん，前述したとおり，たこ焼きの会話における話題は多くが調理や共食行為を遂行するためのものに支配されてしまっていたことから，高難易度の作業の共有により上下関係など所与の関係性を融解してくれることの代償に，調理行為とは独立の話題を交わし，深く議論する機会は損なわれていたと考えられる．

4. おわりに

たこ焼きを介したコミュニケーションは，F のように気遣いに長けた人物の思惑を解消し，上下関係や招待者／被招待者という所与の関係性を希薄にしてくれたことで，より率直な態度によるコミュニケーションとなった．一方の鍋料理を介したコミュニケーションでは，調理や食事という行為にとらわれずに，落ち着いて独立の話題を展開させることができた．その意味で，たこ焼きは動的かつスリリングなコミュニケーション，鍋料理は静的かつ穏やかなコミュニケーションをもたらしたと言えるであろう．

今後は他の協同調理行為を伴う／伴わないコミュニケーションや，レストランや喫茶店などの様々な食卓環境におけるコミュニケーションを観察し，食卓におけるコミュニケーションに関する知見の蓄積を続ける必要がある．

謝辞

本研究の遂行にあたりご助言いただいた，慶應義塾大学の白井宏美先生に感謝する．

参考文献

[1] Kendon, A., (2004) “Gesture”, Cambridge University Press.

[2] 細馬宏通, (2008) “非言語コミュニケーション研究のための分析単位—ジェスチャー単位—”, 人工知能学会誌, Vol. 23, No. 3, pp. 390-396.

[3] 武川直樹, 峰添実千代, 徳永弘子, 寺井仁, 湯浅将英, 立山和美, 笠松千夏, (2009) “3 人のテーブルトークの視線, 食事動作, 発話交替から見えるコミュニケーション: 銘々皿と大皿料理における行動の比較分析”, 電子情報通信学会技術研究報告, ヒューマンコミュニケーション基礎, Vol. 109, No. 224, pp. 17-22.

[3] 諏訪正樹, 筧康明, 矢島佳澄, 仰木裕嗣, (2012) “ライフスキルの学習支援ツールの開発: 身体と意識の共創様態の探究方法論”, 電子情報通信学会誌, Vol. 95, No. 5, pp. 377-384.